急性骨髄性白血病完全寛解後に発症した右精巣骨髄性肉腫の一例

JCHO熊本総合病院・病理診断科
〇中村　春香，飯干未来，寺園広太
平岡　陽介，園田　美子，猪山賢一

はじめに

　骨髄性肉腫は、髄外に骨髄系の芽球からなる腫瘤を形成するまれな腫瘍で、組織の破壊を伴わない白血病細胞の浸潤は含まれない。

症例

患者：70歳代　男性

既往歴：逆流性食道炎、胆摘、HBVキャリア

現病歴：急性単球性白血病にて化学療法後、
骨髄寛解し、フォロー中。再入院時、
右精巣腫脹を自覚し、当院泌尿器科へ
紹介となる。

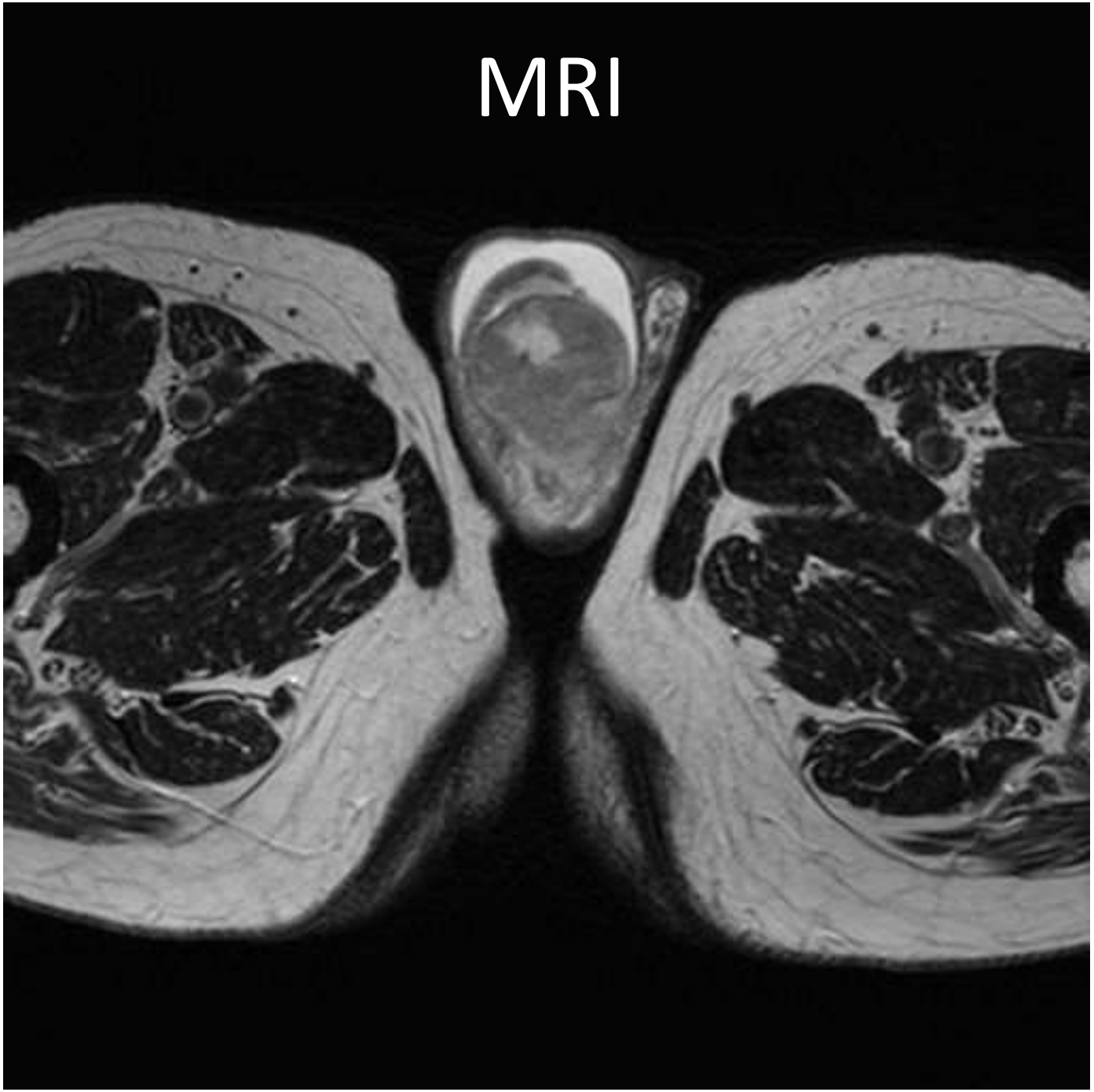
検査所見

MRI：右精巣腫脹あり
　　原発性精巣腫瘍や白血病細胞による
　　腫瘤形成が疑われる。

採血結果：LDH　296（基準値：119-229IU/L）
　　HCGβサブユニット　≦0.1（0.1ng/ml以下）
　　AFP　2.1（0-13.4ng/ml）

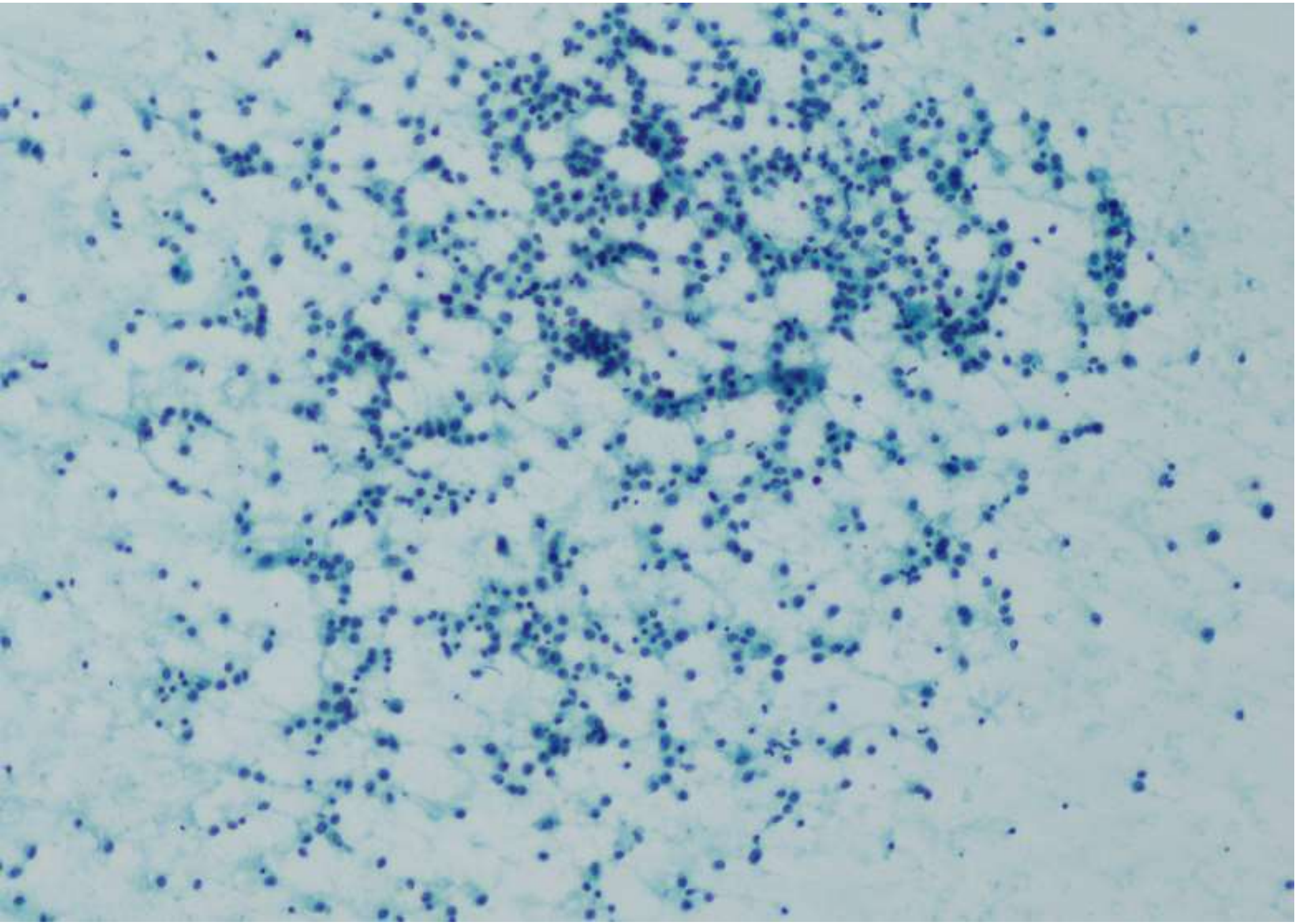
診断目的で右精巣切除が施行された。

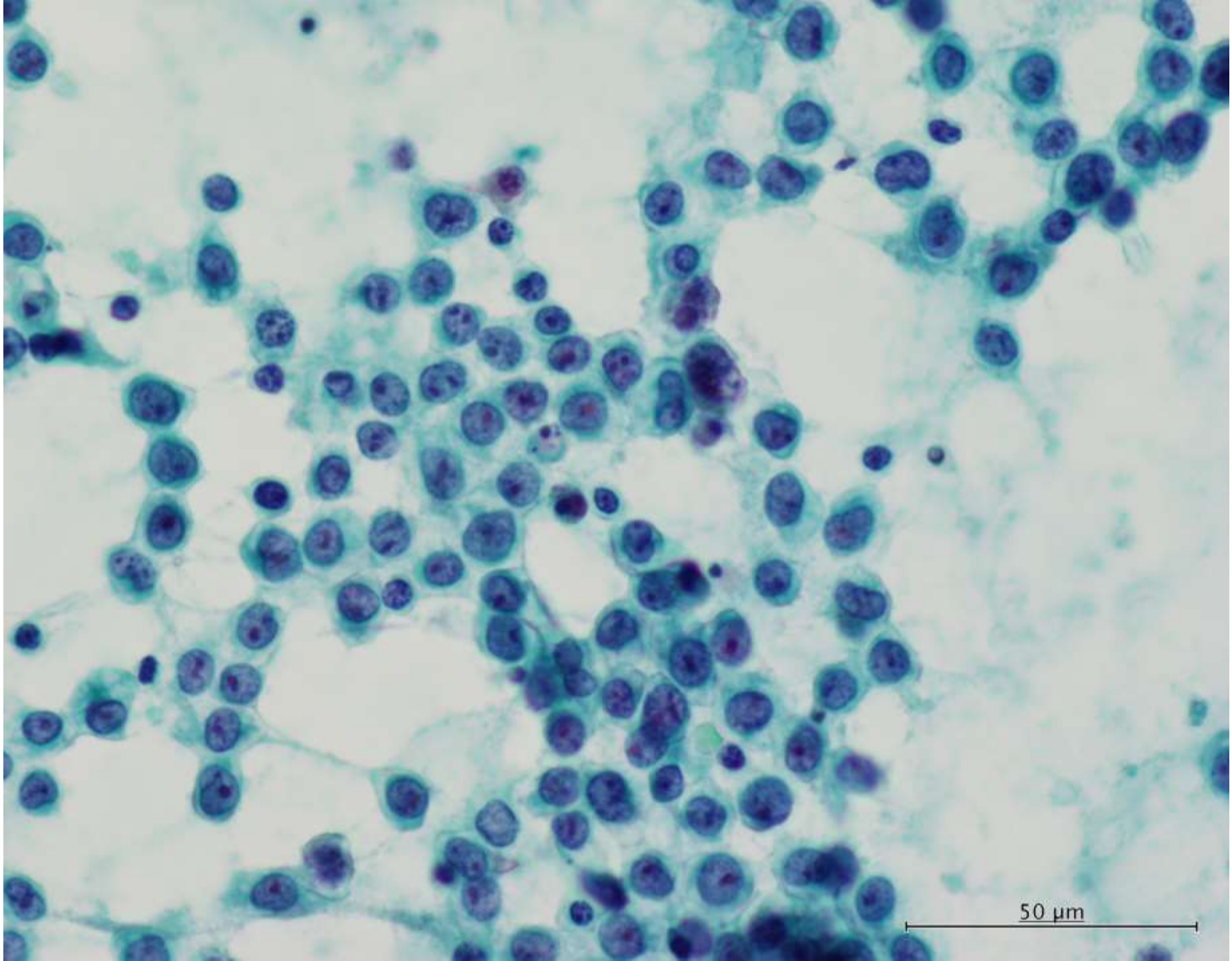
MRI

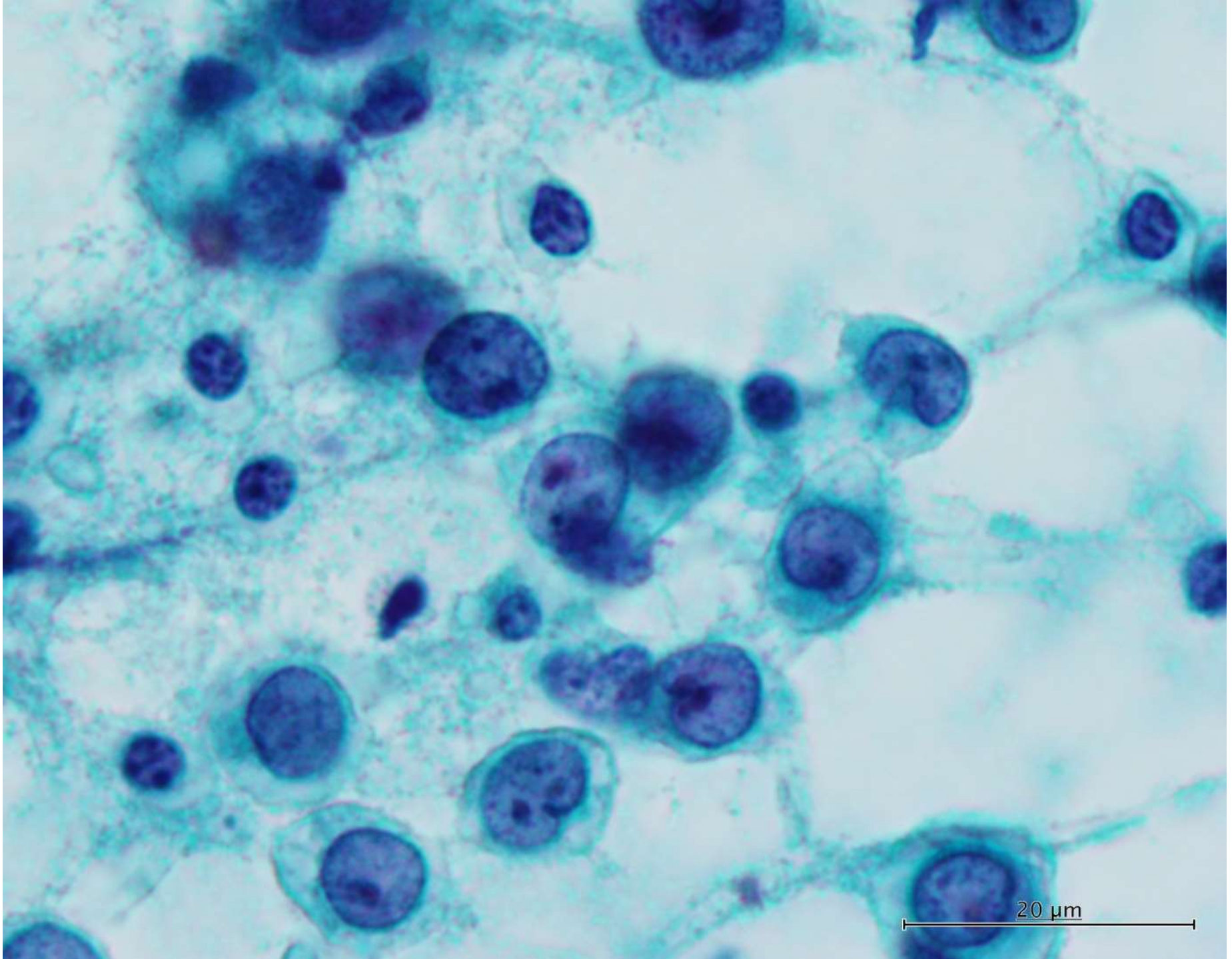


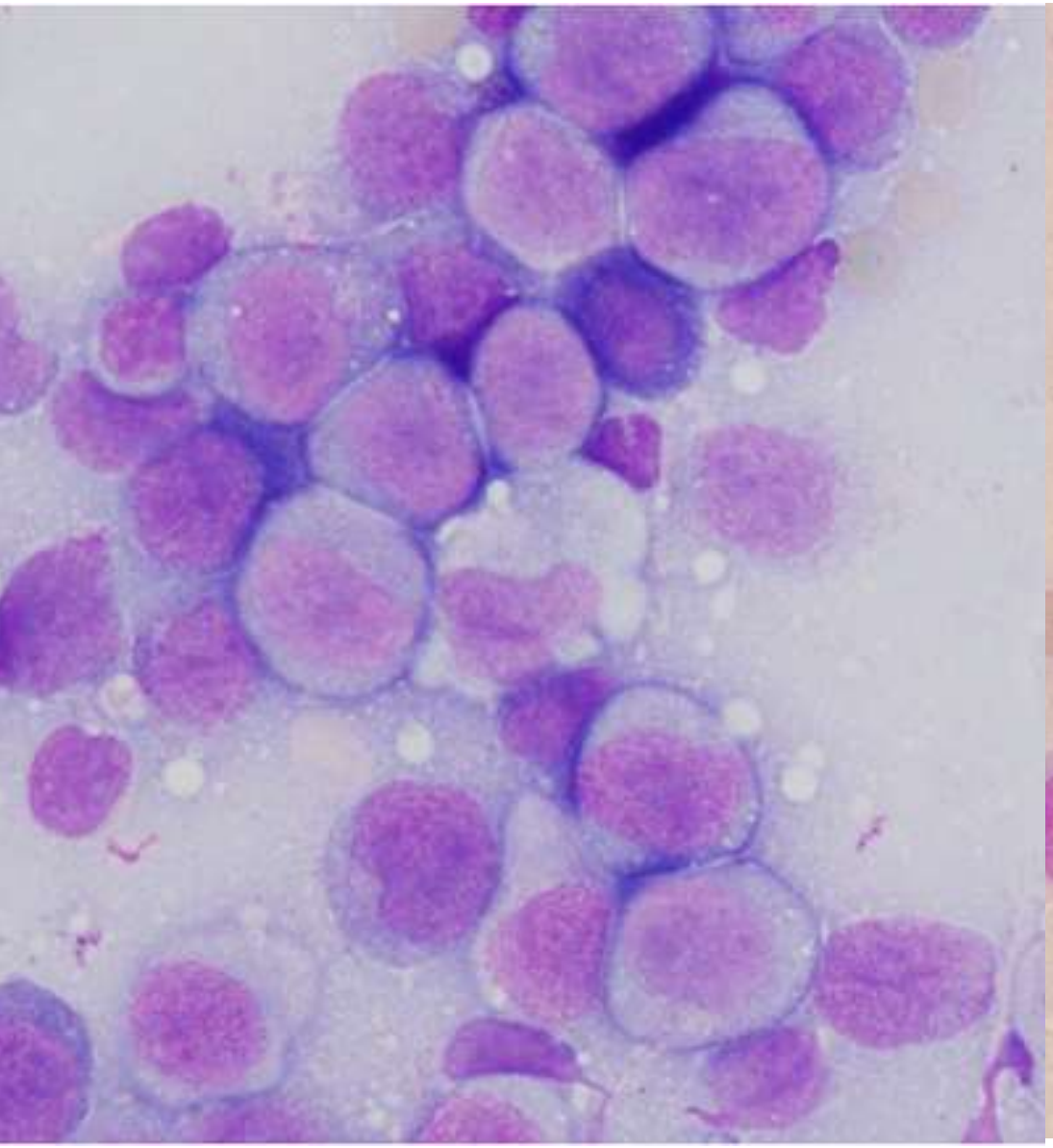


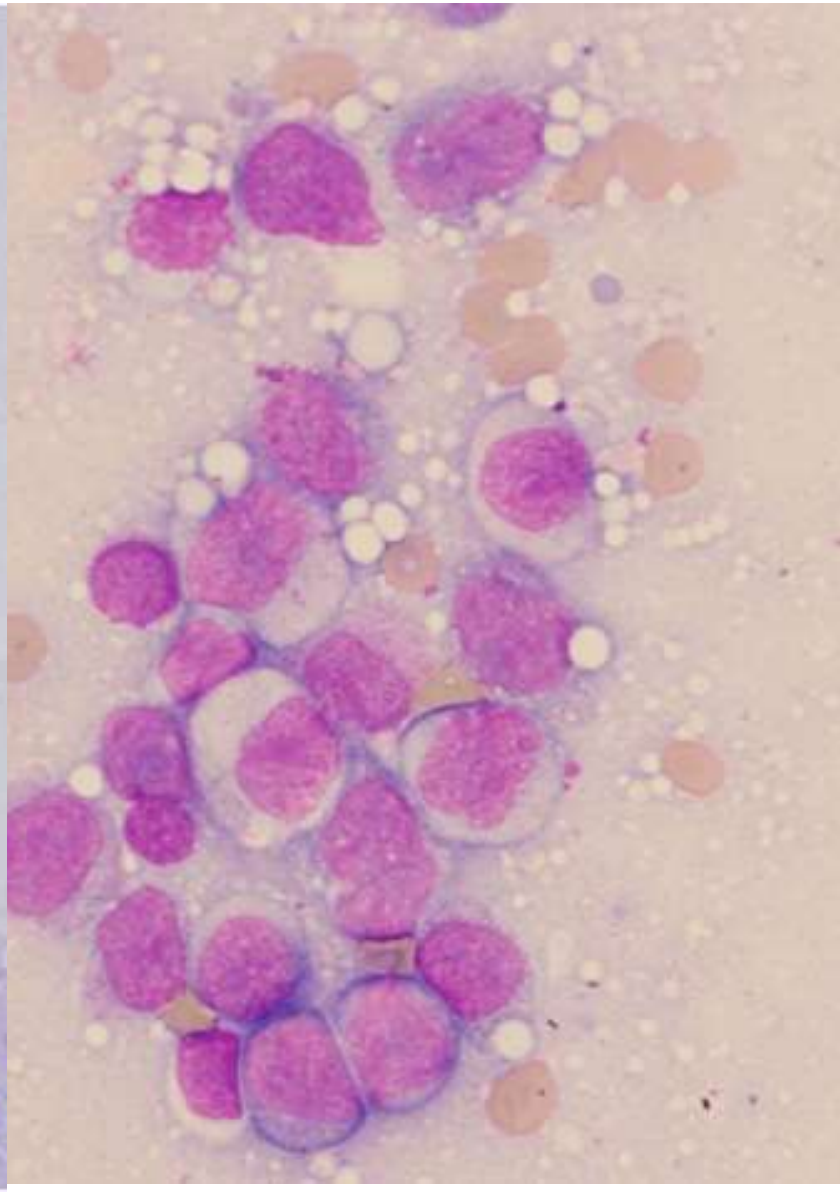
腫瘍部捺印細胞像



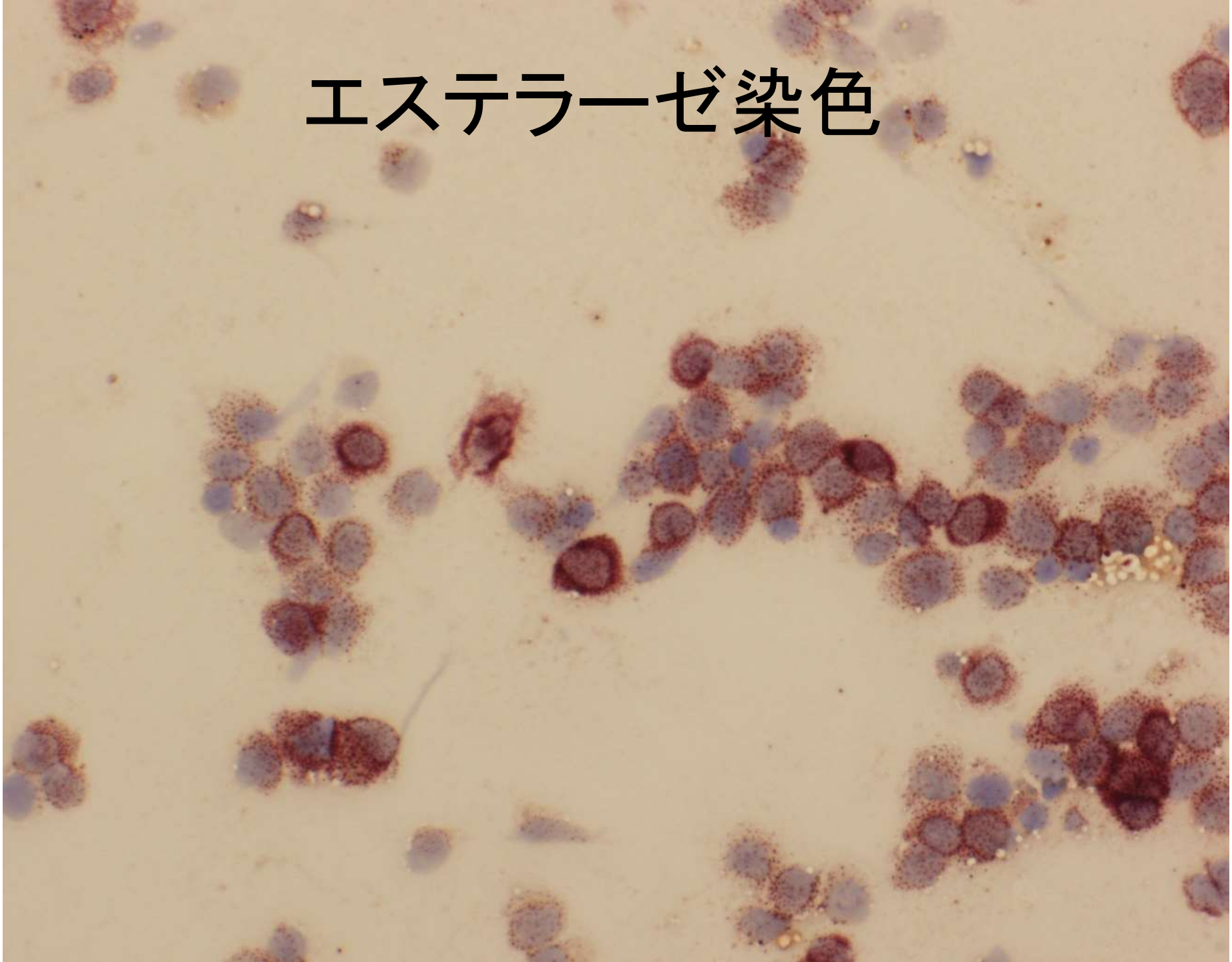

50 µm


20 µm

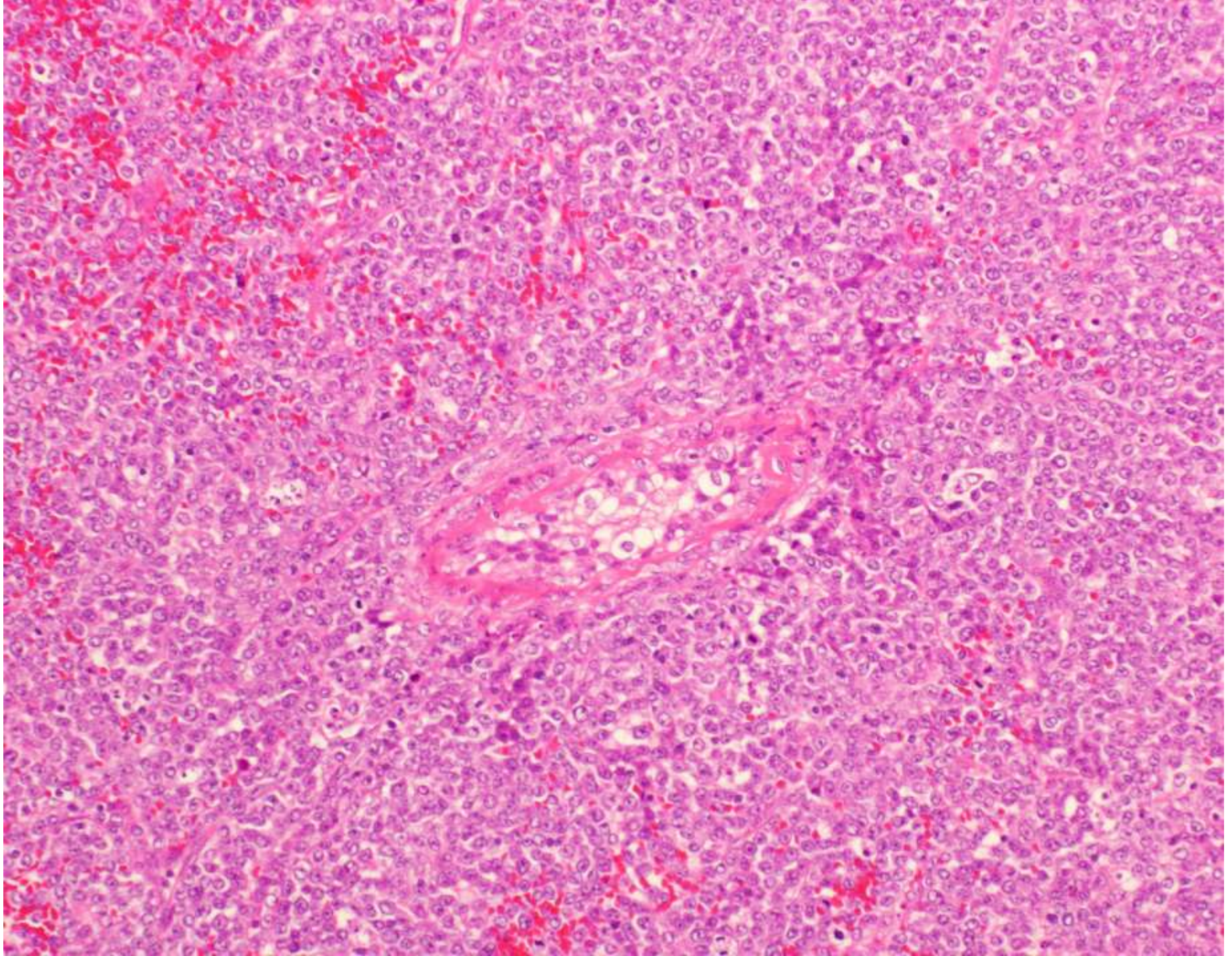


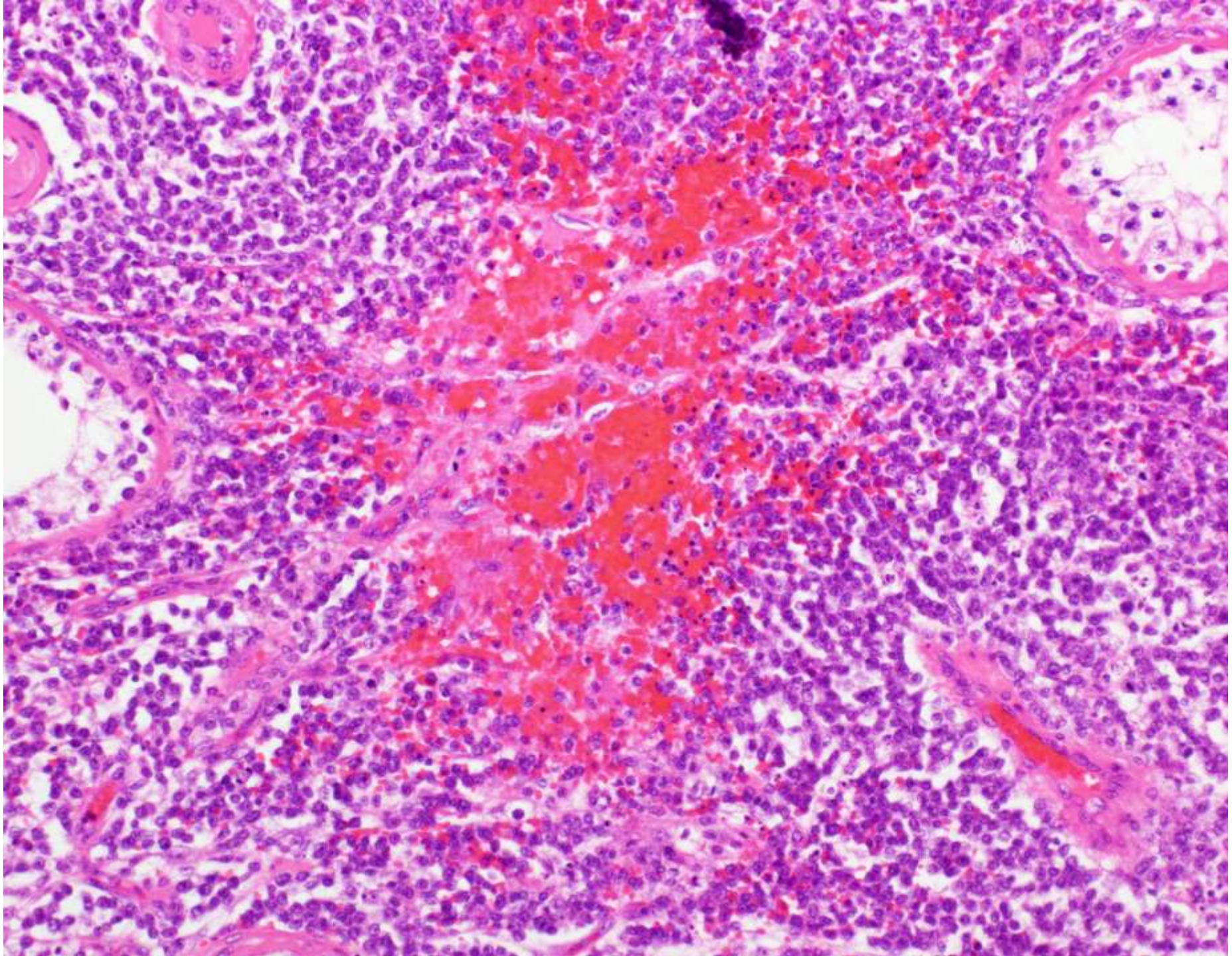


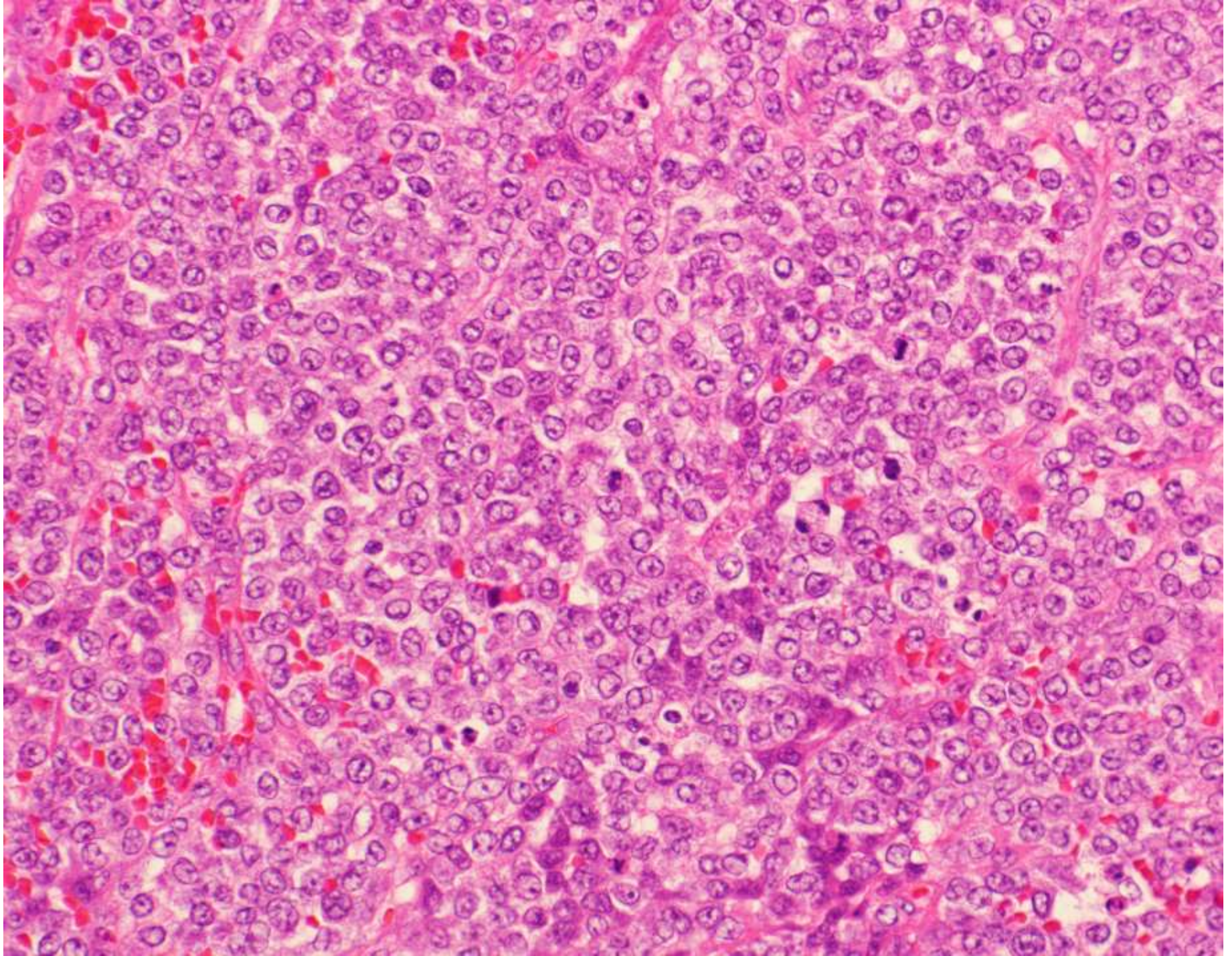
エステラーゼ染色

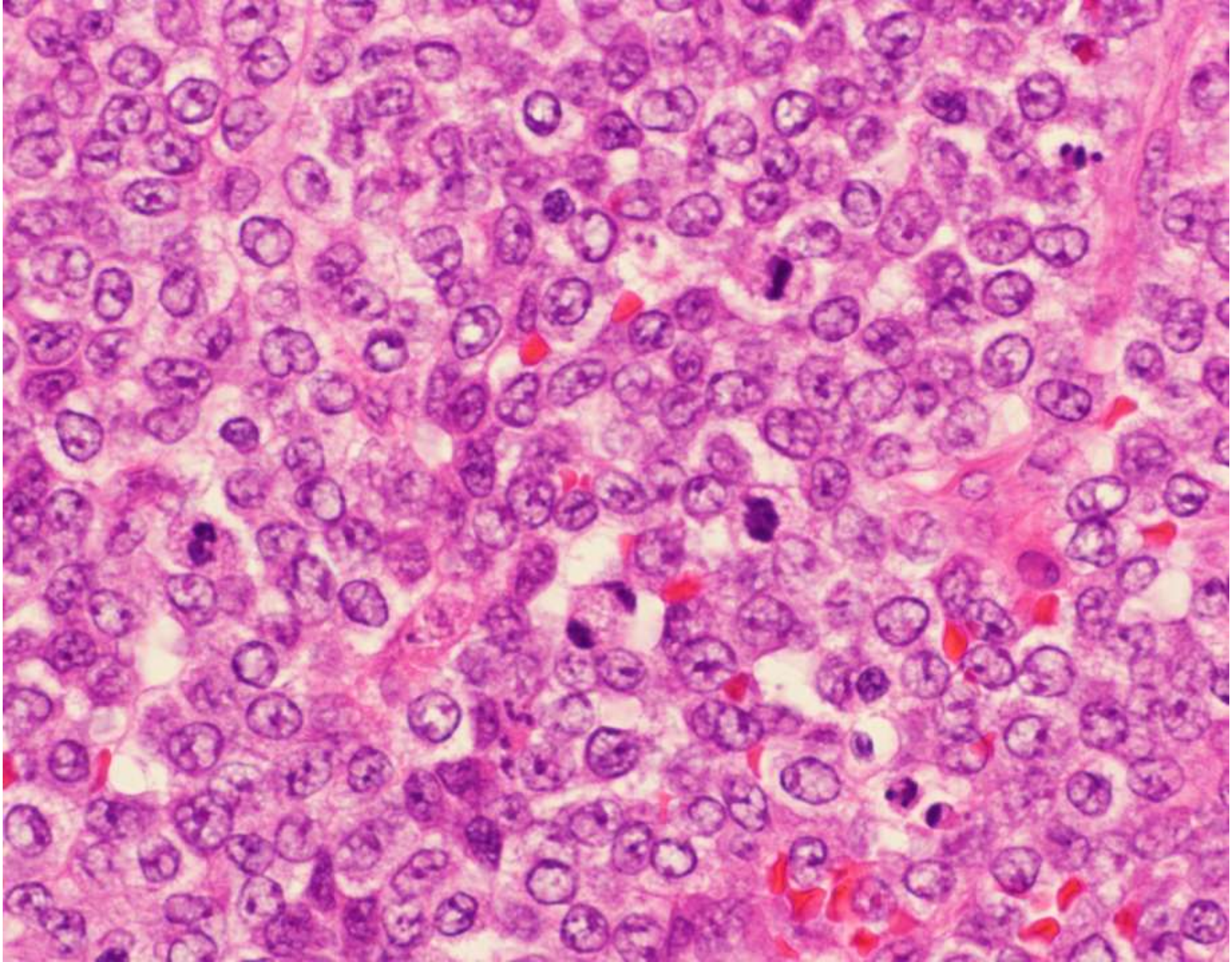


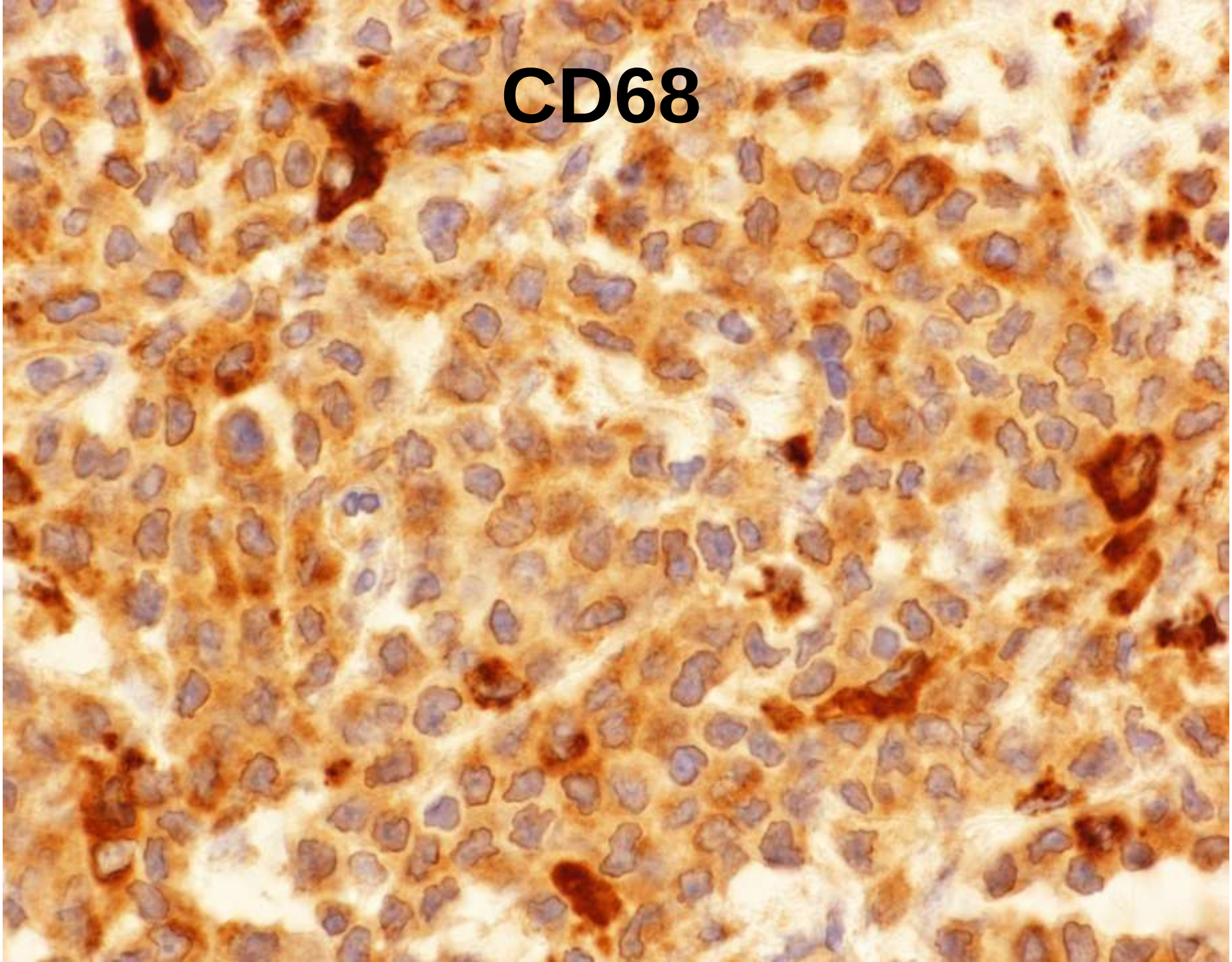
病理組織像

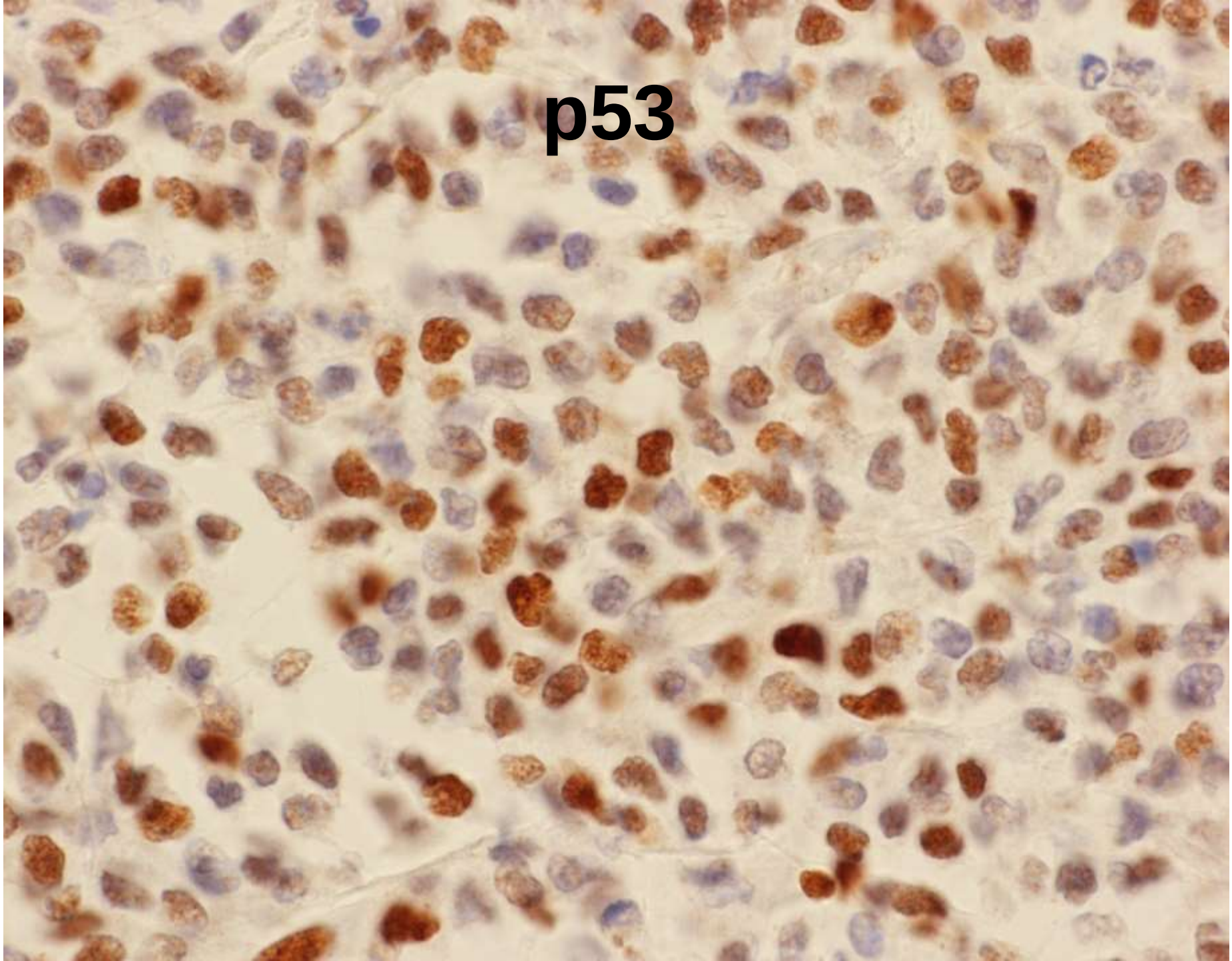


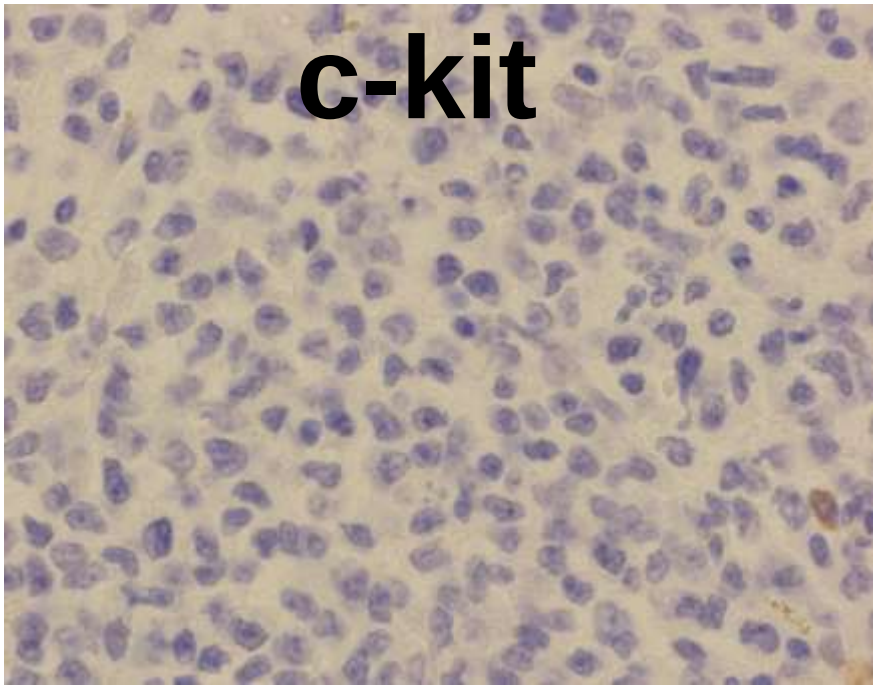


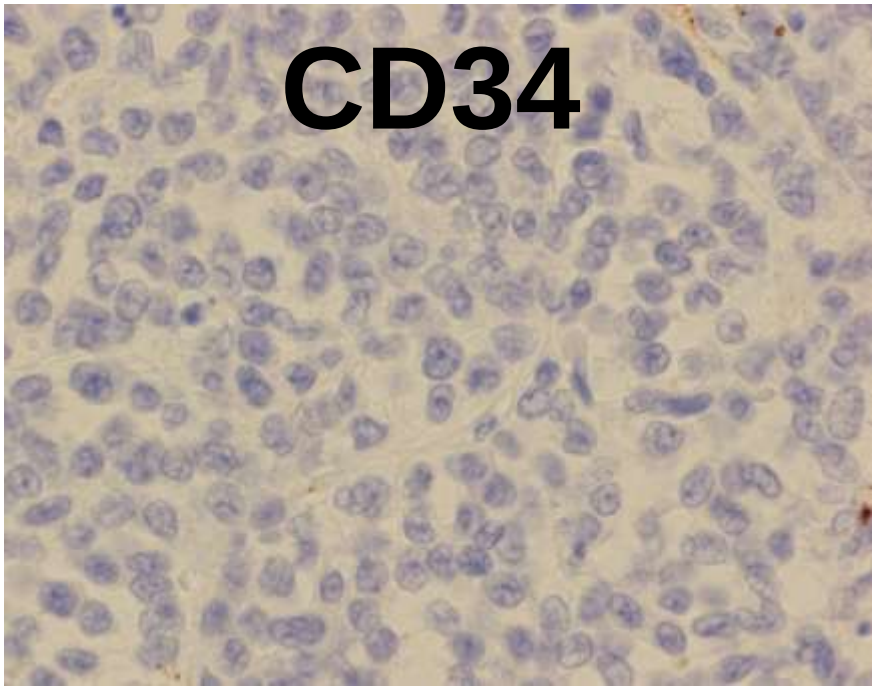


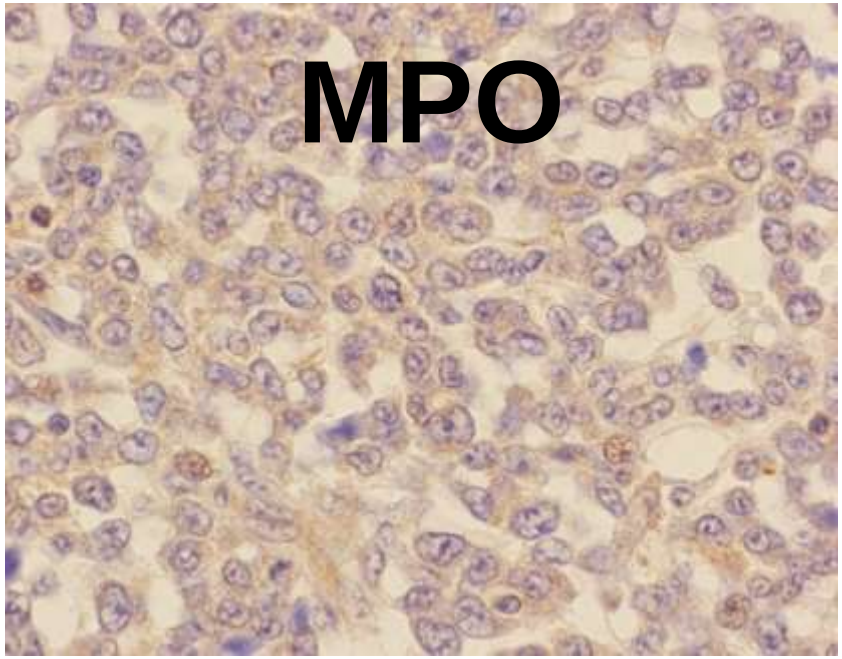



CD68


p53


c-kit


CD34


MPO

免疫染色の結果

陽性：CD68，p53（50%以上）

陰性：CD34，c-kit，MPO

最終診断

Myeloid sarcoma

まとめと考察

① 骨髄性肉腫は皮膚、リンパ節、精巣、消化管など全身のほぼすべての部分に発症し、単芽球系の特徴をもつ症例の半数は皮膚に発症する。

② AMLやMDSと同時に発症する症例や、それらの既往があり発症する症例がある。

③　AMLの再発時に骨髄や末梢血液中に腫瘍細胞を認めない場合でも腫瘍を形成する症例もある。

④　白血病治療歴のある患者は原発性精巣腫瘍とともに骨髄性肉腫による再発も念頭において鑑別する必要がある。